

# 律令国家の東北政策と東国

関口 功一

はじめに

八世紀の律令国家は、その政治的要請のなかで、東山道北部（東北）地方ないし北海道南部地域を「化外」と認識し、その懐柔と侵略とに努めた<sup>①</sup>と、一般に考えられている。そして、それを基底部分で支えていたのは、地域的・歴史的に、「化内」のなかでも各々に隣接する東国地域ないし北海道北部地域であった。こうした起源は、直接には七世紀中葉にまで遡及するようだが、ある意味で断片的とさえいえる考古学的成果でさえ、この「認識」が律令国家自身の架空の所産である可能性の強いことを示唆している<sup>②</sup>。

先に、八世紀前半を中心とする時期の、日本古代の「移動」と「定住」とに関する素描を試みたが、今回は前者の例について考えてみたい。その「移動」の対象者たちは、

一方通行ではなくて、東北・東国両地域の相互間にあった。にもかかわらず、これまで東北地域への流入の場合に比べると、東国地域からの移住の前後の事情については、「俘囚」の反乱などのような特殊な事例を除けば、あまり細かな分析が加えられていないようにも思われる<sup>③</sup>。

特に、律令国家によって人的・物的に多大な負担を強いられたはずの東国地域は、その結果として、経済的疲弊・治安の混乱などに見舞われたというような理解が通用している<sup>④</sup>。それはそうなのかもしれないが、恐らくそれは地域全般にわたって平均的に発生してきた事態ではなくて、各地域でかなりの差異を伴って惹き起こされた現象であったと想像される。そのような要素にもっと注意が払われても良いのではないだろうか。

本稿では、東北・東国両地域間の事例を、より具体的に追跡し、特に東国地域のその後の歴史的展開の、ひとつの

前提を考えてみたいと考える。

になるだろう。

## 一、陸奥・出羽両国の『和名抄』に見える東国地域の郡・郷名

既に多くの論考のなかで指摘されてきていることではあるが、律令国家の東北政策である国家による強制的移住は、特に初期には郡・郷（里）を単位とする集団の移住を基本としており、そのことは端的には東北・東国の双方に共通する地名に示されると考えられている<sup>⑤</sup>。但しそうであれば、郡・郷（里）が地域名称としての程度確立していたのかにもよるが、少なくとも元の居住単位が消滅してしまうような規模と形式のものではなかったことを示していること

『和名類聚抄』（以下『和名抄』と略す）郷名については、近年出土文字資料などによって徐々に明らかにされているが、早く消滅してしまったもの（郷里制の廃止などの制度の改編の段階で、実態は別として消滅してしまったものなどは少なくない）を網羅しておらず、その成立に先立つ九世紀後半頃の実態を示すものと断言して差し支えないだろう。

従って、直接八世紀代の地名と結び付けて考えることにためらいも感じるが、まともりの点でこれを凌駕するものが今のところ見いだせず、先ずこれを主たる検討の素材としたい。傾向を把握するために、可能性を含むものの程度のものも除外せずに整理してみたのが第一表である。

第一表 東北地域との地名を通して見た関係

郡名	陸奥国の郷名に見える東国地域の郡・郷名
白河（セ）○	◎（常陸・飛驒）、大村（常陸・信濃）、丹波（常陸）、松田（相模）、入野（常陸）、長田（伊賀・伊勢・遠江・上野）、小野（尾張・遠江・武蔵・下総・常陸・上野）、藤田（武蔵）、小田（上総）、屋代（信濃）、高野（常陸・越中）
磐瀬（セ）○	◎、山田（伊勢・尾張・三河・遠江・武蔵・上総・常陸・飛驒・上野・下野）
会津（セ）○	倉精（上総）、大島（相模・下総・近江・信濃）、大江（遠江）
安積（セ）○	入野（白河郡）、芳賀（常陸・上野・下野・出羽）、小野（白河郡）、丸子（参照）、小川（伊勢・武蔵・下総）

律令国家の東北政策と東国（関口）

（安達）	亘理（宇多郡）
信夫（七）○	坂田（近江）、三田（伊賀・武蔵・美濃）
（刈田）	高橋（三河・遠江・下総・上野）、新羅
柴田	井上（甲斐・常陸・出羽）、磐城（磐城郡）
（名取）	酒井（安房・越前）、川辺（駿河・常陸・美濃）、山田（磐瀬郡）、大野（三河・駿河・甲斐・上総・常陸・美濃・飛騨・上野・下野・越前）
菊多（キ）○	◎、飯野（伊勢）、小高（常陸）、玉造（駿河）
磐城（キ）○	磐瀬（磐瀬郡・宮城郡・賀美郡）
標葉（キ）○	◎（常陸）、多珂（常陸）
行方（キ）	中村（伊賀・尾張・相模・武蔵・下総・常陸・信濃）
宇多（キ）○	静戸（信夫郡）
伊具 ○	坂本（遠江・上総・美濃・上野）、望多（上総）
亘理（キ）○	磐瀬（磐瀬郡・標葉郡）、丸子（安積郡）、大村（白河郡）、白川（白河郡）、多賀（行方郡）
宮城	新田（武蔵・安房・上総・上野・下野）、白川（白河郡・宮城郡）
黒川	◎（伊勢・遠江・甲斐・武蔵・常陸・越前）、磐瀬（磐瀬郡・標葉郡）
賀美	相模（甲斐）、安蘇（信濃・下野・出羽）
色麻	
（富田）※	

玉造	◎（磐城郡）、信太（常陸・駿河・志太郡）
志太	◎（常陸・駿河）
長岡	◎（近江・越中・出羽）
（栗原）	仲村（宇太郡・磐井郡・新田郡）、會津（會津郡）
磐井	山田（菊多郡）、仲村（宇太郡・栗原郡・新田郡）
江刺	信濃、甲斐
胆澤	白河（白河郡・宮城郡・黒川郡）、下野、上総
新田	◎（武蔵・安房・上総・上野・下野・黒川郡）、仲村（宇太郡・栗原郡・磐井郡）
（讀馬）※	
小田	賀美（賀美郡）
遠田	清水（常陸・近江・信濃）
（登米）	行方（行方郡）
桃生	磐城（磐城郡・名取郡）
気仙	大嶋（會津郡）
牡鹿	賀美（小田郡）
耶麻	
（和我）	

（種實）	
（斯波）	

注一、郡・郷名は基本的に『和名抄』の配列による。そのうち、※は『和名抄』にないもの、（郡名）は地域再編成の形跡の認められるもの、○は「国造本紀」の国造名と一致するとされているもの、（セ）は旧石背国、（キ）は旧石城国。  
 注二、郷名のうち、◎は郡名自体に共通するもののあるもの、それ以外の基本的な表記は郷名（東国地域の国名・東北地域の郡名郡）。また、（地名）は国内に同名の地名が存在する場合。数回に亘って出て来る場合、派生的なものは省略している。以下同じ。

郡名	出羽国の郷名に見える東国地域の郡・郷名
最上	山方（美濃・下総）、芳賀（常陸・上野・下野）、八木（近江・上野）、山邊（上総）
村山	大山（武蔵・常陸・美濃・越前・越中）、長岡（近江）、大倉（相模・下総）、梁田（下野）
置賜	廣瀬（武蔵・近江）、屋代（信濃・白河郡）、宮城（宮城郡）
雄勝	大津（駿河・常陸）、中村（伊賀・尾張・相模・武蔵・下総・常陸・信濃）
平鹿	大井（駿河・甲斐・武蔵・安房・下総・常陸・近江・美濃・信濃・下野・陸奥）、邑知（能登）
山本	◎（近江・美濃）
鮑海	◎（三河）、大原（近江・飛騨）、屋代（置賜郡）
河邊	◎（遠江・駿河・常陸・美濃・出羽郡）、中山（越前）、邑知（平鹿郡）
田川	新家（伊賀）、大泉（河邊郡）
出羽	大窪（下野）、河邊（河邊郡）、井上（甲斐・常陸）、大田（遠江・下総・常陸・美濃・信濃・上野）
秋田	

整理の基準とした『和名抄』の郡名の配列順序は、多少の例外もあるが、基本的には次のようなグループに分別出来る。

a 陸奥国

- ① 現在でいう、いわゆる「中通り」を北上（旧石背国地域）。
- ② 同じく「浜通り」を北上（旧石城国地域）。
- ③ 同じく「陸前」地域を北上
- ④ 同じく「陸中」地域とその他

b 出羽国

- ⑤ 同じく「羽前」地域内陸部を南下
  - ⑥ 同じく「羽後」地域内陸部を北上
  - ⑦ 同じく「羽前」地域海浜部を北上
- これらのうち、郡・郷名などの分布状況から見ると、①と②（Aグループ）、③と⑤・⑥・⑦（Bグループ）に類似点がある。④は『和名抄』段階でも特異な要素がある（Cグループ）。

頻度は決め手にはならないかもしれないが、一口に東北地域と言っても、陸奥国と出羽国とは、国自体の規模の違いを反映して、陸奥国の頻度が高い。また、陸奥国内部でも、その中心は旧石城・石背両国地域にあり、それ以北になると、宮城郡のような比較的南部に位置する郡を除け

ば、全国的な地名の類似性と比較して著しく高い頻度とすることは出来ないだろう。

ただし、注意しなければならないのは、頻度の高い小地域では郡ないし郷といった微細な地名を想定せざるを得ない残存なのに対し、頻度の低い小地域では郡ないし国といったやや規模の大きな地域名称が残存することである。そしてその主体は、東国地域の地名が直接来ていると見るよりも、一旦陸奥国南部諸地域を経由していると考えるべき事例が目立つのである。

各グループ毎に整理し直してみると、Aグループは、東国地域の郡・郷名の頻度が比較的高い。所属郷数によるような郡の規模にもよるが、旧石背国地域の白河・磐瀬二郡や、旧石城国地域の菊多・磐城二郡のように、郡名自体が一致し、または郷名の一致も比較的多い中核郡がある。これらの四郡は常陸・下野両国境に近い南端に位置する。そのほか、柴田郡には「新羅」郷があり、渡来人の移住を直接的に跡付けている。Bグループは、東国地域の郡・郷名もさることながら、Aグループの中核的とみなされる各郡の地名が含まれるという特色がある。そして、それらの頻度は総じてAグループよりも低い。Cグループは、Aグループのうち①の中核的郡名を含むほか、東国地域の国名を直接郷名に採用するという特徴がある。

第二表 東国地域に見る東北地域の地名

	I 旧石城国	II 旧石背国	III 陸奥国	IV 出羽国
伊賀国	I 伊賀郡長田郷//// II////名張郡中村郷/ III/阿拝郡三田郷//////// //////// IV////名張郡中村郷////阿拝郡新家郷//			
伊勢国	I 飯野郡長田郷/度会郡山田郷//老志郡小川郷/ II 飯野郡//// II//// /河曲郡賀美郷//////// IV////////			
志摩国	I //// II//// III//////// IV////////			
尾張国	I 丹羽郡小野郷/山田郡山田郷// II////愛智郡中村郷/ III//////// //////// IV////愛智郡中村郷////////			
参河国	I /賀茂郡山田郷// II 額田郡大野郷//// III//加茂郡高橋郷//////// //////// IV////飽海郷////			
遠江国	I 長田郡・長上郡長田郷・磐田郡小野郷/周智郡山田郷/榛原郡大江郷// II////浜名郡坂本郷 III//城飼郡高橋郷////城飼郡賀美郷//////// IV////////長下郡 大田郷・周智郡大田郷/			
駿河国	I //// II 安倍郡川辺郷・志太郡大野郷/駿河郡玉造郷//// III//////// 志太郡//////// IV////志太郡大津郷/富士郡大井郷//安倍郡川辺郷//			
伊豆国	I //// II//// III//////// IV////////			
甲斐国	I //// II 山梨郡大野郷//// III//山梨郡井上郷////都留郡賀美郷/都留 郡相模郷////甲斐(国)////IV////巨麻郡大井郷////山梨郡井上郷//			
相模国	I 足上郡松田郷//鎌倉郡大島郷// II////余綾郡中村郷/ III////////相模 (国)//////// IV/鎌倉郡大倉郷//余綾郡中村郷////			
武蔵国	I 多摩郡小野郷・榛沢郡藤田郷/入間郡山田郷//多摩郡小川郷/ II////男 衾郡中村郷・賀美郡中村郷・秩父郡中村郷/ III/荏原郡三田郷////多摩郡 新田郷・賀美郡新田郷/賀美郡//////// IV/男衾郡大山郷/入間郡広 瀬郷/男衾郡中村郷・賀美郡中村郷・秩父郡中村郷/久良郡大井郷・児玉郡 大井郷////			
安房国	I //// II 長狭郡酒井郷//// III////朝夷郡新田郷//////// IV////安房郡大井郷////			
上総国	I 埴生郡小田郷//市原郡山田郷・海上郡山田郷・埴生郡山田郷/海上郡倉 精郷// II 海上郡大野郷////埴生郡坂本郷・望多郡 III////畔蒜郡新田 郷////////上総(国)//// IV山辺郡////////			
下総国	I 海上郡小野郷//葛飾郡大島郷/香取郡小川郷/ II////匝瑳郡中村郷/ III結城郡高橋郷//////// IV埴生郡山方郷/海上郡大倉郷//匝			

## 律令国家の東北政策と東国（関口）

以上の整理によるならば、まず移住の順序について

## I 東国諸地域

⇐

## II Aグループの各地域／Bグループのうち出羽国の各郡

⇐

## III Bグループのうち陸奥国の各郡

⇐

## IV Cグループの各郡

のような段階差があったのではないかと思われる。なお、郷名への国名の採用を重視すれば、I⇓IVのような移動距離の長い場合もあったかもしれない。それを跡付けるのは

## ・色麻郡相模郷

## ・江刺郡信濃郷・甲斐郷

## ・膝沢郡下野郷・上総郷

のような各郡の諸郷が認識出来る。但し、その前後関係はなお検討の余地がある。現実にはこれと同様のものが他に幾つかあった筈だが、『和名抄』郷名段階では既に消滅しているのだろう。

次に移住の規模（『単位』について、

・郷単位：Aグループを中心とする

・郡単位：Bグループを中心とする

・国単位：Cグループを中心とする

のように整理出来る。Cグループは、先に述べた二郡の五郷である。これらの郷の所属する各郡は、いずれも郷数の少ない（郡の広狭には必ずしも対応しないだろう）場合が多いので、あるいは郡内での東国地域からの移住者の相対的位置は、かなり大きな意味を持つてくるようになっていたかもしれない。

天平期を挟んだ前後の時期で、移配に従事した階層が変質している事は既に指摘されているが、神護景雲二年以降は「陸奥及他国」という表現が見られるようになってきており、右に見てきたような分類は、そのような段階差に起因しているとして差し支えないだろう。

更に注意される事は、流動性の高い地名を元にする整理であるために、断定的なことは言えないが、東国地域の人の東北地域への移住は、各小地域に亘って平均的に行われた訳ではなく、一時石城・石背両国として建置された、ふたつのまとまりのある地域の存在を無視することが出来ないのではなからうか。このことは、言い換えれば石城・石背両国の設置は、単に全国的な地域編成の時期に、たまたま計画された地域区分の改編であったのではなく、陸奥国の本格的な編成の準備段階として周到に容易された政策のひとつであったと見るべきなのではないだろうか。これ

佐渡国	I 雑太郡小野郷//// II 賀茂郡大野郷//// III////////// IV//////////
-----	--

※ I 石城国・II 石背国・III 陸奥国・IV 出羽国の地名の配列は、郡単位を中心にし、次のように表記している。

I 白河郡/磐瀬郡/会津郡/安積郡/信夫郡

II 菊多郡/磐城郡/榎葉郡/行方郡/宇多郡/亘理郡

III 安達郡/刈田郡/柴田郡/名取郡/伊具郡/宮城郡/黒川郡/賀美郡/色麻郡/富田郡/玉造郡/志太郡/長岡郡/栗原郡/磐井郡/江刺郡/胆沢郡/新田郡/讃馬郡/小田郡/遠田郡

IV 最上郡/村山郡/置賜郡/雄勝郡/平鹿郡/山本郡/飽海郡/川辺郡/田川郡/出羽郡/秋田郡

なお、III の登米郡以下斯波郡までには独自の東国地域の地名は認められないので省略。東北地域内部の重出についても基本的に省略。

らの関係を、今度は東国地域中心に整理してみれば第二表のようになる。これらの中には、単に同名で実体的なものも当然含まれているであろう。また、東北・東国相互で、各々郡名段階・郷名段階があるので、主として時期差に起因するようない部を分別出来ない部分があるが、幾つかの傾向は窺い得るであろう。東山道については明確ではないが、東海道は志摩国以西、北陸道の若狭国以

西では移住が行われていない可能性があり、その他では国の等級で言う小・下国も除外されるべきである。このことは「柵戸」の移住などの具体的な国名とほぼ一致する。もう少し細かく見てみると、東海道では陸奥国に隣接する常陸国での地名の一致が多いほか、遠江・武蔵・上総・下総などの各国に若干のピークが認められる。国毎に見ると、尾張国から遠江国まではあまり明確な傾向は認められない。駿河国では志太・安倍の西部の郡にやや重点がある。甲斐国ははっきりして、東部の山梨・都留の両郡に重点がある。武蔵国では北部地域が優位にある。上総国では埴生・海上の国府所在郡（市原）に隣接した郡に重点がある。下総国では匝瑳・海上の、太平洋岸の両郡が目立つ。常陸国は絶対数が多く、平均化している。

また、東山道に目を転ずると、近江国では美濃国との通行の意味の大きな坂田郡が多い。美濃国は平均化しており、飛騨国では大野郡が多い。信濃・上野両国では、あまり明確な傾向は認められないが、下野国では芳賀・那須のような東北地域に比較的近い郡に重点があるようである。

これらに対し北陸道では絶対数が少なく、特に出羽国に隣接する越後国に全く例を見ないのが特徴的である。加賀・能登のような小さな国も原則的に移住者の供給源から外されているのだらう。この地域でやや傾向のあるのは、

	瑛郡中村郷/相馬郡大井郷////珂屋郡大田郷/
常陸国	I 茨城郡白河郷・真壁郡大村郷・河内郡大村郷・新治郡丹波郷・那賀郡入野郷・多珂郡高野郷/久慈郡山田郷//那賀郡芳賀郷/ II 那賀郡川辺郷・信太郡大野郷//行方郡小高郷/行方郡行方郷・多珂郡多珂郷/鹿島郡中村郷/ III//行方郡井上郷////多珂郡賀美郷//信太郡信太郷////////筑波郡清水郷 IV 那賀郡芳賀郷/河内郡大山郷//鹿島郡中村郷/那賀郡大井郷//那賀郡川辺郷//行方郡井上郷・久慈郡大田郷/
近江国	I //蒲生郡大島郷// II//// III/坂田郡・山県郡三田郷////////坂田郡長岡郷////////神崎郡清水郷 IV 愛智郡八木郷/坂田郡長岡郷/高島郡広瀬郷/浅井郡大井郷/野州郡山本郷/坂田郡大原郷////
美濃国	I //// II 厚美郡川辺郷・賀茂郡川辺郷////恵那郡坂本郷 III////////// IV 山方郡/武芸郡大山郷//可児郡大井郷/不破郡山本郷//厚美郡川辺郷//安八郡大田郷・大野郡大田郷/
飛騨国	I 大野郡白河郷/荒城郡山田郷// II 大野郡大野郷//// III////////// IV////大野郡大原郷////
信濃国	I 佐久郡大村郷・埴科郡尾代郷//水内郡大島郷// II////伊那郡中村郷/ III 小県郡安蘇郷////信濃(国)////更級郡清水郷 IV//埴科郡屋代郷/伊那郡中村郷/筑摩郡大井郷/(屋代)////水内郡大田郷/
上野国	I 吾妻郡長田郷・緑野郡小野郷・群馬郡小野郷/山田郡山田郷//勢多郡芳賀郷/ II 山田郡大野郷////碓氷郡坂本郷 III//片岡郡高橋郷////新田郡新田郷//////// IV 勢多郡芳賀郷・群馬郡八木郷////////吾妻郡大田郷/
下野国	I /那須郡山田郷//芳賀郡芳賀郷/ II 那須郡大野郷//// III////芳賀郡新田郷//安蘇郡安蘇郷////下野(国)//// IV 芳賀郡芳賀郷/梁田郡//那須郡大井郷//足利郡大窪郷//
若狭国	I //// II//// III////////// IV////////
越前国	I //// II 大野郡//// III////////大野郡賀美郷//////// IV/大野郡大山郷//今立郡中山郷////
加賀国	I //// II 加賀郡大野郷//// III////////// IV////////
能登国	I //// II//// III////////// IV////羽咋郡邑知郷//(邑知)////
越中国	I 砺波郡高野郷//// II 砺波郡大野郷//// III//////////砺波郡長岡郷//// IV/婦負郡大山郷////F//
越後国	I //// II//// III////////// IV////////

越前国の大野郡と越中国の砺波郡である。これらはかなりの可能性を持つであろう。以上について、明確な傾向の無い国も含め、国府所在郡を含んで偏りがある国が多いように思われる。

東北地域内部の東国地域の地名は勿論だが、総じて陸奥国内部での地名の共通性が高いことが注目される。特に、石城・石背両地域に属する地名の比重はかなり大きく、これらのなかに存在する東国地域の地名が第一次的なもので、両地域以外のものは第二次的なものであるという印象は、この整理によっても裏付けられるであろう。また、出羽国と陸奥国との間にも共通する地名が見られるが、陸奥国から割かれた郡（最上・置賜）が存在するという事情だけではなく、陸奥国内部とほぼ同様に理解出来ると思われる。いずれにせよ、地名のみでの地域の絞り込みは、かなり困難な作業であるので、具体的な移住者像を重ね合わせることによって、地域の絞り込みの可能性を、次に探ってみよう。

## 二、東国地域からの移住者像

前節で取り上げた移住の、具体的構成要素である対象者は、一体どのような人々であったのだろうか。考古学的所

第三表 陸奥国南部の「国造本紀」の国造名

国造名	対応するとされる郡名	同祖・同族関係（東国/西国）	知られる郡領名
道奥菊多	菊多(キ)	天津彦根命(or 建許呂命系)	道口岐閉・茨城・馬来田・須恵・師長・山背・凡河内
阿尺	安積(セ)	(「道奥菊多」と同じ)	(同 左)
思	亘理(キ)	天湯津彦命系	佐渡/阿岐・波久岐・怒麻
伊久	伊具	(「思」と同じ)	(同 左)
染羽	標葉(キ)	(「道奥菊多」と同じ)	(同 左)
浮田	宇多(キ)	崇神皇子(豊城命系)	上毛野・下毛野・針間鴨
信夫	信夫(セ)	(「思」と同じ)	(同 左)
白河	白河(セ)	(「思」と同じ)	(同 左)
石背	磐瀬(セ)	(「道奥菊多」と同じ)	(同 左)
石城	磐城(キ)	(「道奥菊多」と同じ)	(同 左)
	會津(セ)		
	行方(キ)		

※郡名の内、(キ)は石城国地域、(セ)は石背国地域にそれぞれ該当する。

見では、東北地方に関東地方の影響の残る遺構・遺物が発見されたのは仙台平野を中心とし、七世紀中葉を上限とするらしい<sup>(8)</sup>。そのようなもののなかには、集落や墳墓だけでなく、官衙と考えられるものも含まれているという。集落や墳墓では、その成立の前提に、人の「移動」を考えざるを得ないものがあるようである。

もっとも仙台平野については、それ以前の古墳時代中期頃、既に畿内との直接的交渉を窺わせる形跡が確認されている<sup>(9)</sup>。前方後円墳の分布のようなものに関しては、さらに大きな範囲にわたって見ることが出来る<sup>(10)</sup>。

但し、中間的な位置にある石城・石背両国には該当する福島県地方では、目下のところそのような傾向が知られておらず、やや不自然である。また、土器などに見る関東地方との直接的な交渉の形跡は、非常に短期間で、程なく在地系の土器群のなかに解消されてしまい、そうした部分のみに注意し過ぎるのは考えものである。

恐らくこれらとは段階差のある事実起因すると考えられるものに、多賀城などの官衙遺跡や窯跡から出土する文字瓦がある。これらは、ヘラで刻まれたものに「下・常・毛・上」、「瓦を製作する際の模骨や範に刻まれたものが、反転したものに「上・下・相」などの種類の文字が見られるのだが、東国地域の国名を省略したもので、各国を単位と

した集団的移住の単位を根拠とすると看なされている<sup>(11)</sup>。この単位は、『和名抄』の中の国名と一致する郷名を想起させる。

一方、史料上に見る東北地域の地域編成は、古代を通じて行われているようになっており、そのことは、あたかもこの地域が著しく未整備な状況にあったかのような印象を与える。近年ではそのことを、安易に「未開」に結び付けるようなことはなくなってきたいるが、右に触れたような考古資料を積極的に評価すれば、同じ史料であっても異なった整理が出来るように思われる。

まず、『先代旧事本紀』国造本紀の記事について、郡司の任命を前提とするような「国造」の所在を示すというような見解もあるが、上総・下総両国及び常陸国とともに掲載される「国造」名の多い石城・石背両国地域の「国造」は、東国地域に由来すると考えられるもので占められている。

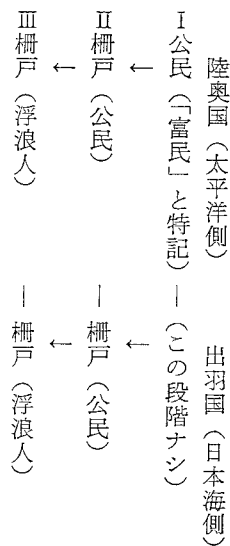
石城・石背地域に比較すると、上総・下総地域では史料上あまり明快に確かめることが出来ないが、大宝令制下の早い時期に、いわゆる「上毛野」氏の主要な人物が集中的に投入されており、その段階でかなりの地域再編成が行われていた可能性がある。もしそうで

あれば、「国造」名が例外的に集中してきているのも郡領の選任に関する問題の切実さを窺わせるに足る。石城・石背両国の「国造」の系譜を、参考までに示せば第三表のようになる。

この整理によれば、具体的な氏族名までは特定し難いが、菊多・安積・標葉・石城・石背の各郡では常陸・上総・相模といった諸国とのつながりがあったように見える。また、宇多郡では上野・下野両国との関係があったように見える。亘理・伊具・信夫・白河の各郡では、やや明瞭さに欠けるが、佐渡国が関係しているようであり、あるいは北陸道諸国とのつながりがあったかもしれない。このうち白河郡では、郡領に「奈須直」氏が知られることにより、隣接する下野国（那須郡）との直接的な関係が推定出来る。これらのことは、先に述べた地名の分布の傾向とも一致する部分がある。もしそうなら、「国造本紀」のいう「国造」のなかには、よく言われるような大宝二年頃よりもさらに下った時期（石城・石背両国が設置された養老二年前後）の問題に關係した部分を含む可能性があることになる。

第四表は、石城・石背地域における和銅・養老期にかけての関連記事を整理したものである。この時期は、地域編成の動向が特に急であるが、同じ東北地域であっても、陸奥国と出羽国とは内容に差があることに気付くだろう。

東国地域からの人の「移住」は、概して「柵戸」によるものと考えられているが、そこには時期差と地域差とが存在すると思われるのである。すなわち、



のように整理出来る。このことは、ふたつの地域の開発の程度や、それに伴う地域編成の様式の違いに起因している可能性がある。

大宝令制以前では、郡を設置するような地域編成を行う場合、人の「移動」を伴うことが現実にはしばしばあった。第四表⑥の、異例とさえ言える「富民一千戸」（五十戸一里で二十郷分に相当する）という大規模な移民は、石城・石背両国の設置に先立って行われており、両国を設定するために特に実施されたのではないだろう。

第四表に見える「丹取郡」の設置は、その音の類似性から「名取郡」に關係したものであるという理解がある一方、その位置から石城・石背両国の分立に先立って設置されるのは不都合であるとして、最近では「玉造軍団」に關係す

るような大崎平野北部のことであったとする理解が一般的になってきている。<sup>(13)</sup>「丹取郡＝名取郡」と言えるかどうかはとりえず措くとしても、この時期の郡の設置は、畿内地域の例を含む点に端的に示されるように、未整備な地域に関する行政区分の改編であるとは考え難い場合がしばしば認められ、そうした意味では、拠点的な小地域の再編成に関する事例で、例えば石城・石背両国の分立に先立って、それに近接した「名取郡」が設置されることがあったとしても何等不都合は無いのである。<sup>(14)</sup>

そうであれば、この地域に所在する氏族（特に郡領級の）のある部分については、本来「蝦夷」であった訳ではなく、「移動」後の東国出身の公民の姿を端的に示すものが含まれている可能性に留意せざるを得ないのである。

東北地域に分布する氏族について、改めておおまかに整理すれば、

- ① 明らかな「蝦夷」と考えられる姓を負う者。
- ② 公民と考えられる姓を負う者。<sup>(15)</sup>
- ③ 漸移的な姓を持つ「俘囚」の者。

が存在する。第一に注意されなければならないのは、②ないし③の人々である。無論それらの人々が、例外なく図式的理解で律し切れるものではないが、通常の記事のなかではそうした人々が東国地域からの移住者なのか、本来東北

地域に居住していたのかを分別しづらい。ここで注意されるのは、東北地域に特徴的な複姓の改賜姓である。ここでは「阿部・大伴・上毛野・下毛野」という、東北地域にはやや異質な姓を付しているのである。

第五表は、その実態を整理したものである。改賜姓後の移住を想定出来るような個人の居住を示す場合を除けば、記事そのものとしては、出羽国の「田夷」の例が一例認められるだけであり、こうした改賜姓は基本的に陸奥国のみのものであると考えられる。

その初見は、『続日本紀』天平勝宝五（七五三）年六月八日条で、下限は『日本後紀』弘仁六（八一五）年三月六日条である。地域的分布については、旧石城・石背両国地域に關係するものが多く、时期的にもやや古いようである。このことは、より正確には東国地域からの移住を陸奥国全体にかかわるものであったと考えるよりも、陸奥国からの出羽国の分離を含む石城・石背両国の分立が、この時期の極めて重大な課題であったことを示しているのではない。右に見える人々は、移住によって生じた土着の同姓者との混同を嫌って、より上位の姓を希望したものと考えられる。

「柵戸」の移配は、頻度では出羽国に向けてのものが多いが、質的には陸奥国のそれの方が良質なものであったと思われる。それは、陸奥・出羽両国の整備状況の差に起因

律令國家の東北政策と東國（関口）

第四表 和銅養老期の東北地域の地域編成

No.	年 月 日	陸 奥 (移 配)	行 政 区 分 の 改 変	出 羽 (移 配)
①	和銅元・九・二十八		(前略)越後國言新建出羽郡。許之	
②	和銅五・九・二十三		太政官議奏曰建國辟疆武功所貴設官撫民文教所崇其北邊蝦狄遠晏阻險官縱狂心屢驚邊境自官軍雷擊凶賊霧消狄都晏然皇民無擾誠望便乘時機遂置一國式樹司宰永鎮百姓奏可之於是始置出羽國割陸奥國最上置賜二郡隸出羽國焉	
③	和銅五・十・一		新建陸奥國丹取郡	
④	和銅六・十二・二			
⑤	和銅七・十二・二			
⑥	靈龜元・五・二十	移相模上総常陸上野武藏下野六國富民千戸配陸奥國		
⑦	靈龜元・十一・二十 九		陸奥國蝦夷篤三等邑良志別君宇蘇弥余等言親族死亡子孫數人常恐被狄徒抄略乎請於香河村造郡家為編戶民永保安堵、又蝦夷須賀君古麻比留等言先祖以來貢獻昆布	勅割尾張上野信濃越後等國民二百戸配出羽柵戸

⑧	靈龜二・九・二十三		常採此地年時不闕今國府郭下相去道遠往還累旬甚多辛苦諸於閑村便建郡家同百姓共率親族永木闕貢並許之	
⑨	養老元・二・二十六		從三位中納言巨勢朝臣唐言建出羽國已經數年吏民少稀狄徒未馴其地膏腴田野廣寬請令隨近國民遷於出羽國教喻狂狄兼保地利許之因陸奥國置賜最上二郡及信濃上野越前越後四國百姓各百戸隸。出羽國(後略)	以信濃・上野・越前・越後四國百姓各一百戸配出羽柵焉
⑩	養老二・五・二		(前略)割陸奥國之石城標葉行方字太日理常陸國之菊多六郡置石城國割白河石背會津安積信夫五郡置石背國割常陸國多珂郡之鄉二百一十烟名曰菊多郡屬石城國焉	
⑪	養老三・七・九		令陸奥國分柴田郡二鄉置刈田郡	遷東海東北陸三道民二百戸配出羽柵焉
⑫	養老五・十・十四			
⑬	養老六・八・二十九	令諸國司簡點柵戸一千人配陸奥鎮所焉(後略)		



(富田)※	//大伴安積連(←丸子部)//.//.//
玉造	下毛野俯見公(←吉彌侯部7人)//.//.//.//
志太	//.//.//.//
長岡	//.//.//.//
(栗原)	//.//.//.//
磐井	//.//.//.//
江刺	//.//上毛野膽澤公(擬大領)//.//
膽澤	//.//.//.//
新田	上毛野中村公(←吉彌侯部)//.//.//.//
(讃馬)※	//.//.//.//
小田	//大伴安積連(←丸子部)・陸奥意薩連(←意薩公)//.//.//
遠田	//大伴山田連(←丸子部)・陸奥磐井臣(←竹城公・黒田竹城公・白石公等122人)・陸奥高城連(←竹城公・荒山等88人)・陸奥小倉連(←小倉公等17人)・陸奥石原連(←石原公等15人)・棕崎連(←柏原公13人)・遠田連(←遠田公等69人)//.//.//
(登米)	//.//.//.//
桃生	//.//.//.//
気仙	//.//.//.//
牡鹿	牡鹿連(←丸子), 武射臣(←春日部3人)//.//.//.//
耶麻	//.//上毛野陸奥公(←丈部, 大領)//.//
(和我)	//.//.//.//
(稗貫)	//.//.//.//
(斯波)	//.//物部斯波連//.//
不明	//上毛野陸奥公(←吉彌侯部)//下毛野陸奥公(←丈部36人)//.//
最上	//.//.//.//
村山	//.//.//.//
置賜	//.//.//.//
雄勝	//.//.//.//
平鹿	//.//.//.//

第五表 陸奥・出羽両国の改賜姓を中心とした豪族の実態

部 名	豪 族 名
白河(セ)○	阿倍陸奥臣(←丈部10人), 靱大伴連(←靱大伴部8人)//大伴白河連(←大伴部数人)//阿倍陸奥臣(←奈須直, 大領), 陸奥白河連(←狛造)//.//
磐瀬(セ)○	磐瀬朝臣(←吉彌侯部)//大伴宮城連(←□□□) //阿倍陸奥臣(丈部, 權大領)////陸奥磐瀬臣(←吉弥侯部)
會津(セ)○	阿倍會津臣(←丈部2人)//.//.//.//
安積(セ)○	阿倍安積臣(←丈部直), 安倍安積臣(←丈部13人)//(阿倍安積臣), 大伴安積連(←丸子部・大田部)//.//.//阿倍陸奥臣(←矢田部・丈部等17人)
(安達)	//.//陸奥安達連(←狛造)//.//
信夫(セ)○	阿倍信夫臣(←丈部数人), 上毛野歟山公(←吉彌侯部7人), 下毛野静戸公(←吉彌侯部)//.//阿倍陸奥臣(←大田部, 擬主帳)//.//
(刈田)	大伴刈田臣(←大伴部)//.//.//.//
柴田	名取朝臣(←公)/安倍柴田臣(←丈部), 大伴柴田臣(←大伴部)//.//阿倍陸奥臣(←丈部, 權大領)//.//阿倍陸奥臣(權大領)
(名取)	上毛野名取朝臣(←吉彌侯部9人)//.//.//.//刑取宿祢(大毅)
菊多(キ)○	//.//.//.//湯坐菊多臣(←丈部21人)
磐城(キ)○	於保磐城臣(←丈部)//.//磐城臣(大領), 阿倍陸奥臣(←陸奥丈部臣, 擬少毅・丈部, 權主政)//.//
標葉(キ)○	阿倍陸奥臣(←丈部10人)//.//阿倍陸奥臣(←陸奥標葉臣, 少領)//.//
行方(キ)	大伴行方連(←大伴部), 下毛野朝臣(←公)//大伴行方連(←大伴部)//.//.//
宇多(キ)○	上毛野陸奥公(←吉彌侯部)//.//.//.//
伊具 ○	//.//阿倍陸奥臣(←陸奥・臣, 權擬大毅・擬主帳)//.//
亘理(キ)○	湯坐亘理連(←宗何部3人)//大伴亘理連(←五百木部)//.//.//
宮城	//.//物部(權大領)//.//
黒川	靱大伴連(←靱大伴部8人)//大伴行方連(←大伴部)//靱伴連(大領)//.//
賀美	阿倍陸奥臣(←丈部10人)//.//.//.//
色麻	//.//阿倍陸奥臣(←陸奥臣, 少領)//.//

山本	//・//・//・//
飽海	//・//・//・//
河邊	//・//・//・//
田川	//・//・//・//
出羽	//・//・//・//
秋田	//・//・//・//
不明	//上毛野緑野直(←置井出公)//・//・//

注1) 郡・郷名は基本的に『和名抄』の配列による。そのうち、※は『和名抄』にないもの、( )は地域再編成の形跡の認められるもの、○は「国造本紀」の国造名と一致するとされているもの、(セ)は旧石背国、(キ)は旧石城国。

注2) ウジの配列順序は、『続日本紀』//『日本後紀』//『続日本後紀』//『日本文徳天皇実録』//『日本三代実録』のようになっている。

している可能性が高い。このことは、神護景雲二年頃より、他国人と並んで陸奥国の諸郡の人々が「奥郡」へ移配されるようになってくる事と符合しているように思われる。石城・石背両国の地名が見られる地域がその移配先であったろう。

以上の諸要素に、これらの改賜姓を加味して、それぞれの移住者たちの、「移動」以前の立場に関係するものであると考えられれば、各々の地域でどのような編成や負担形態が採用されたのか推定することが可能になる筈である。

改賜姓以前の姓は、当然のことながら東北地域に一般的で、東国地域でもしばしば見ることの出来る姓(君子部・丸子部・丈部など)を負うものが多いが、上毛野・下毛野を姓に含むものについては、各々個別の氏族の存在を意識しながら、元の居住地を姓に含めたと見て、ほぼ両地域からの移住を裏付けると考えて良いのではないか。それら以外についてはやや決め手を欠くが、地名と移住者とが一致する部分を絞り込んだ傾向として整理してみると次のようになる。

【伊勢国】飯野郡 ↓磐城郡  
 【遠江国】榛原郡大江郷↓会津郡  
 【駿河国】駿河郡玉造郷↓磐城郡↓玉造郡  
 【甲斐国】 ↓江刺郡

○【相模国】

足上郡松田郷↓白河郡  
 ↓色麻郡

○【武蔵国】

榛沢郡藤田郷↓白河郡  
 ↓胆沢郡

○【上総国】

殖生郡小田郷↓白河郡↓小田郡↓賀美郡↓牡鹿郡

海上郡大野郷↓菊多郡  
 望多郡 ↓亘理郡

○【常陸国】

那珂郡入野郷↓白河郡↓安積郡  
 芳賀郷↓安積郡

川辺郷↓菊多郡

新治郡丹波郷↓白河郡

行方郡 ↓行方郡

小高郷↓磐城郡

多珂郡 ↓行方郡

↓江刺郡

片岡郡高橋郷↓柴田郡

新田郡 ↓新田郡

胆沢郡 ↓胆沢郡

砺波郡高野郷↓白河郡

白河郡—黒川郡—宮城郡—胆沢郡

磐城郡—名取郡—桃生郡

磐瀬郡—標葉郡—宮城郡—賀美郡

※○は「富民」を「移動」させた国名。

これら以外にも可能性の高い例はあるが、当面移住者と重ならない為除外している。こうした整理によれば、例えば牡鹿宿祢嶋足のような者は、かつては上総国殖生郡出身者の九子部であったと想定出来る訳である。彼が、「大國造」として神護景雲三年に大量改賜姓の申請を行った背景というのも、そのように理解すればより明快なものとなるだろう。

いずれも相互に欠落する要素があつて、断定的なことは言えないが、ここまでの操作によって

①国名↓郡名

②郡名(↓郡名…) ↓郡名

③郡名(↓郷名…) ↓郷名

④郷名(↓郷名…) ↓郷名

のようなバリエーションがある事がわかる。これらは恐らく時期差を示すのであろう。特に①について、信濃(国)を含む事から、少なくとも霊龜元年の移住ではないことが推定出来る。但し、信濃国が積極的に移配に参加するのは養老期までであるので、二次的な移配であるにしても、信濃国の移配単位が消失してしまう以前であったと見るべきであろう。

また④について、甲斐国・下総国などのように、初期には移配が行われないものの、特定の郡の地名に集中する傾向がある国では、郷を単位とする移配が行われた可能性はある。このことは、柴田郡の新羅郷などによっても裏付けられるであろう。この種の渡来人の移住に関しては、東国地域では、たとえ同様の規模であっても「郡」として設置されているという点で注意される。

以上を整理してみると、東国地域から東北地域への移配は、石城・石背両国を通過点とし、一対一対応というような整然とした形態ではなく、一郡内に数国の人々が雑居する場合がしばしばあったように思われる。特に、拠点的な地域（白河・磐城・磐瀬の各郡など）では、郡程度の単位で二次・三次と更に奥地へ移配が重ねられた可能性が強い。移配の規模は、当初では郡を設置し得る程度の単位があったが、次第に郷単位程度にと縮小されていったようである。移住者の元の居住地については、時期差や各地域での違いもあり、特定するのが更に困難であるが、常陸国のような陸奥国に隣接して移住の絶対量が多いと考えられるような例を除けば、①国府所在郡ないしそれに隣接した郡、②交通の便が良い郡などで賄っている場合が多い。

このような偏りによって、結果的に影響を被る地域というのも、国毎に違いはあるものの、特定の地域に偏っていくのは逆の事態も発生していた事は、「俘囚」として処理されている人々の名前のなかに、東国地域の公民身分の人々と全く同じものがしばしば認められることによって推測されるだろう。

『延喜式』（主税式諸国本稻条・俘囚稻条）によってその規模がある程度推測出来る。近江・肥後などのような例外的な国を除くれば東国地域のそれは概して大きい<sup>17)</sup>。具体的な配置郡の特定は困難であるが、例えば上野国では『和名抄』郷名段階では意図的に削除された可能性のある「俘囚」郷が三例知られている。いずれも旧利根川右岸地域の甘楽・多胡・緑野の各郡に所在する。これらの郡は、十一世紀段階での上野国全般の郡衙正倉の遺存数などから見て、（国衙の直接的な支配を媒介とするような）比較的安全した支配が継続していた可能性<sup>18)</sup>がある。恐らく他の東国地域でも、こうした意図的な配置がなされていたものであろう。そのような地域では、当初は安定的な状態が保たれていたと想像できるが、「俘囚」を受け入れる事によって徐々にそれを破られていった場合があったとも考えられる。『類聚国史』卷一九〇風俗部の俘囚関連の記事の、少なくとも半数が移配された各国での俘囚の反乱に関係したものである事もこの事を強く推定させる。

一方、東北地域に対する征討政策は、既に多くの先学が

る傾向があると考えられるのではないだろうか。

### 三、律令国家の地域編成政策の諸段階と東国地域

律令国家の東北政策が進行するに従い、それと並行する形で東国地域にも変化を生じていたことは、皮肉な現実であったと思われる。

かつて高橋富雄氏は、東北地域の令制化の段階について、

- ①文化征服（第一期）
- ②国郡創置（第二期）
- ③武装植民（第三期）
- ④軍事征服（第四期）

と想定された<sup>16)</sup>。考古資料などの増加によって、細部では再検討を必要とする部分が無いとは言えなくなってきたいるが、大筋では今日でもなお承認されるべき理解だろう。

各段階で移住の痕跡は認められるが、その規模自体が大きく、東国地域が主導的な位置を占めてくるのは②の段階以降で、これまで述べてきたように、そこで導入された集団は、結果として政府の先兵として移住を繰り返すことになる。尤も、肯定的な部分ばかりではなくて、婚姻や通交などを重ねるなかで、本来公民身分であった者が「俘囚」身分に転落し、内地へ移送されるといった本来の「移動」

明らかにしているように<sup>19)</sup>、地域への動揺を倍加させただけではなく、造都と並んで律令政府自身の財政を著しく圧迫した。それを賄うために地域に対して様々な負担が強いられる結果となったが、その「代価」として頒布されたもののひとつに勲位がある。東国地域の勲位を帯する者の地域的分布は、移住とは直接関係無いが、概ね東北地域を対象とする征討戦争の従事者の実態を示していると考えられる。六国史に見える事例を中心に整理してみたのが第六表である。

勲位は、征夷戦争の従事者だけではなく、戦功のあった者に与えられていて、表には明らかな中央官人は除いている。軍士以上が授与の対象である事を明示する場合もあるが、一般の兵士は殆どその対象になっていないだろう。また、神社への授与の例がかなり多く見られ、その意義は別に検討の必要があるものの、個人の事例の分布の空白を埋める部分があるように思われる。

その地域的分布は、知られる征夷戦争への参加国名で言うなら、東海道の遠江・駿河両国、東山道で美濃国などが空白であるが、本来は存在したと思われる。動員という意味では、陸奥国を中心とし、そこから距離を隔てる程に希薄になってゆくのは当然の成り行きである。実際に征夷戦争に動員されたのは、各国の動員が強調される以上に、

陸奥国	767(宇多郡)十等吉禰侯部(→上毛野陸奥公)石麻呂・769(牡鹿郡俘囚)七等大伴部押人・790(遠田郡領)八等遠田公(→遠田臣)押人/804(?)六等吉禰侯部押人・812(遠田郡)七等竹城公金弓/835(紫波郡?)五等吉弥侯(→物部斯波連)宇加奴等・836(白河郡十等八溝黄金神)・【(?)五等吉弥於加保, (?)九等伴部子羊侯・838(?)】五等吉弥侯部東人麻呂・六等夷守志為奈・840(耶麻郡)八等丈部(→上毛野陸奥公)人麻呂・(磐城郡)八等磐城臣雄公, (宮城郡)七等物部已波美・841(白河郡十等都々古和氣)神・(柴田郡)七等阿倍陸奥臣豊主, (黒川郡)八等伴連黒成, (江刺郡)八等上毛野胆沢公毛人・844(?九等伊波止和氣天神)・(磐城郡)八等磐城臣雄公・(白河郡)九等狛造(→白河連)智成・845(九等刈田嶺神)・849(磐瀬郡)九等丈部(→阿倍陸奥臣)宗成・(色麻郡)八等丈部(→阿倍陸奥臣)千繼//859(四等計仙麻神, 四等志波彦神, 五等拜幣志神, 零羊埴神, 四等志波姫神・五等日高見神)・864(864(九等飯大嶋神, 十等阿福麻水神)・(磐瀬郡)九等吉弥侯部(→陸奥磐瀬臣)豊野・866(?)五等伴部建麻呂・870(九等刈田嶺神)・877(?)五等吉弥侯部真保
出羽国	//838(飽海郡五等大物忌神)・844(川辺郡)八等奈良己智豊繼・845(最上総)七等伴直道成, 九等同繼益, 九等同福尊//872(五等大物忌神)・877(六等月山神)・878(三等大物忌神, 四等月山神, 七等袁物忌神)
若狭国	////859(八等若狭比古神)
越前国	//839(一等氣比大神)//859(一等氣比神・六等推前神・六等剣神)
加賀国	////
能登国	////859(一等氣多神)
越中国	////
越後国	////
佐渡国	////

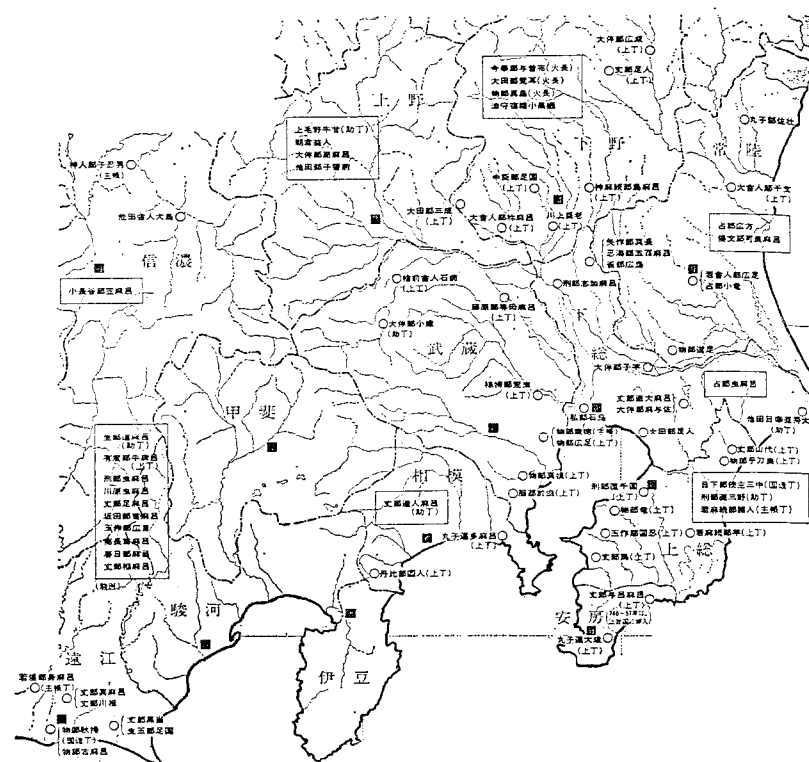
※人名は「年(郡名)勲位姓(→改賜姓)名」, 神社名は「年(勲位一神)」で表記。  
地域名称を特定出来る事例を中心に整理。同じ書物で重複するものは初出のみ掲出。

(東国地域からの移住者の存在をひとつ前提に)陸奥国の地域での動員量が大きくなっている事を示すのだろう。  
時期は八世紀後半以降に集中し、特に平安初期の征夷戦争に当たって右のように人々が動員された可能性が強い。この事は、征夷戦争の困難度に関係する規模ともかわっているだろう。逆に言えば、その段階では既に、東国地域の武力を主体に考える事が困難な事態になっていた可能性も考えられる。また、東北政策と

第六表 六国史に見える東国地域の勲位帯位者

	続日本紀/日本後紀/続日本後紀/文徳実録/三代実録
伊賀国	////
伊勢国	////
志摩国	////
尾張国	////
参河国	////
遠江国	////
駿河国	////
伊豆国	////
甲斐国	////864(十二等物部神)
相模国	※768(?)六等漆部直(→国造相模宿祢)伊波//842(高座郡)八等壬生直黒成//
武蔵国	※768(入間郡)五等物部直(→入間宿祢)広成//840(加美郡)七等檜前舎人直由加麻呂//878(七等秩父神), 885(六等畦切神)
安房国	////
上総国	////877(五等玉埴神, 五等姉前神)
下総国	781(猿島郡)五等安倍猿島朝臣(←)墨縄//835(匝瑳郡)六等物部匝瑳連(→宿祢)//
常陸国	※768(筑波郡)五等壬生宿祢小家主/825(新治郡?)七等新治直軍・(鹿島郡)八等中臣鹿島連貞忠/836(鹿島郡)一等建御賀豆智命・847(那賀郡)八等吉田神)・(十等薩都神)/857(八等吉田神)/867(薩都神)
近江国	////866(?八等兵神)
美濃国	////
飛騨国	////
信濃国	////859(八等建御名方富命神)
上野国	/813(甘楽郡)七等壬生公郡守/843(新田郡)七等犬養(→丈部臣)子羊//859(甘楽郡)八等貫前神)・881(七等貫前神, 十二等小祝神, 十二等波己曾神, 十二等賀茂神, 十二等美和神, 十二等稻裏地神)
下野国	/824(?)八等輕部豊益/836(四等二荒神)/857(四等二荒神)/859(四等二荒神)

律令国家の東北政策と東国(関口)



第1図「東国防人歌」の防人  
 (『日本歴史地図』原始・古代編下、柏書房1982に加筆転載)

直接関連する訳ではないが、人的負担という面では防人も同様の結果を齎したと考えられる。その関連資料は更に限定されるが、『万葉集』に収められたといわゆる「東国防人歌」が注意される（第一図参照）。

「防人歌」に採録された量そのものが断片的で、傾向の把握さえ困難であるが、史料残存に関する偶然的要素を意識しながら順次見て行くなれば、先ず東海道の遠江国では長下・龜玉・佐野・山名の各郡からの出身が知られ、天竜川下流域での集中が注意される。駿河国では所属郡名が、甲斐・伊豆両国は記載そのものが無く、その詳細は不明である。相模国では、顕著な偏りは認められない。武蔵国では、他国に隣接するような郡に偏っているが、その出身はほぼ全域に及んでいると見るべきだろう。下総国・上総国（安房国を含む）でも同様である。常陸国では、国府所在郡に隣接する郡に偏っているが、陸奥国などと隣接する多賀郡などに見られないのは意味があるかもしれない。

次いで東山道の信濃国では、小県・埴科両郡の、国府所在郡に隣接する郡にやや偏っている。上野国では所属郡を示さないが、山間部を除く各郡に平均的であるか、同じく西部地域の各郡に偏る可能性がある。下野国でも偏りは認められない。

実施された期間の点ではかなり断続的な防人制で、任地

での「定住」を前提にしている訳ではないが、現実には生産年齢の男子を取られ、帰還もままならないことがしばしばあったので、行く先が東北であれ、西国であれ、負担を強いられた側から見ればたいした差はなかったろう。これが、各地域内部で分担的に分散していればまだ良いが、そうした配慮が欠けていれば、負担の重複した地域の荒廃の速度は倍加されたであろう。

以上見て来たように、東国地域では通常負担せざるを得なかった租税に関する負担だけではなく、その時期と階層とに変化は見られるものの、人的諸負担が期待されていた。そしてその負担は、全域に亘って平均的に行われた訳ではなく、特定小地域がその対象とされるのが通例であった。

このことは、特定地域の矛盾を深刻化させ、その地域内部での律令制に逆行する動きを胎胚させることになったろう。そうした地域が、各国で国府周辺を主体としていた場合がむしろ多いことに注意すれば、ほかならぬ地域支配の拠点が、先ずその現実への対応を迫られた可能性が強い事に注意せざるを得ないのである。

## むすびにかえて

本稿で明らかに出来たことを整理し、残された課題を明

示する事で結びに代えたい。

律令国家の地域編成政策による、東国地域から東北地域への移民は、結果から見れば東北地域の不安定性を増幅させ、一方で東国地域そのものの基礎構造を一変させた。具体的には、中級以上の農民を「移動」させたことにより、下級農民の位置が上昇する場合も稀であったであろうが、主として残された有力農民への土地や生産手段の集中化が、畿内地域などよりも加速的に進行し、その経営基盤が脆弱化したと考えられる。このことは、東北地域でも同様で、良好な耕地には農民が集中し、分割が進行するとともに、それを巡っての争いも頻発したと想像される。「俘囚」の反乱のようなものも、当初的にはそのような形態のものであったろう。農業経営の規模も以前よりむしろ零細化し、局地的にはかなり不安定なものになっていったと想像される。

特定地域への偏りは、例えば国府所在郡などの場合、そこが一貫して安定的であるためにそのような措置が採られたのであれば、①それ以外の郡の支配は当初から不安定であった、②安定的な地域の安定が失われた、というような差異があった筈で、地域毎に検討を深める事が必要になってくる。

また、地域の組成の問題についても、比較的上級の農民

が流出したことにより、それに代わってその役割を果たしたのは、残された有力農民だけではなく、中央では中級以下の貴族層で、官吏として下向してそのまま居留する場合がしばしば見られた<sup>(23)</sup>というような面も留意しておかなければならない。

少なくとも、東北地域の動きと東国地域の動向とは、決して無関係であったのではなく、相互に起こるべくして起こっているであり、その遠因はほかならぬ当初の律令国家の（現実と乖離した理念的な）政策にあったと考えざるを得ないのである。加えて、国司の支配も本来のものから見れば全く形骸化し、律令制の変容は決定的なものとなった。律令制の自己修復力の欠如のなかにもその一因があったと考えられるが、この点については別に制度的な問題についての考察を加えなければならぬだろう。

相互に著しく欠落する資料を、少なからず時期の前後する史料によってつなぎ合わせるという不本意な方法によって叙述せざるを得なかった。今後増加が予想される同時代的な出土文字資料の増加などによって、より綿密な叙述を展開することが可能な時期が追い迫り来ることになるだろう。

例えば、最近東北地方各地で調査されている遺跡出土の文字資料のほか、滋賀県甲賀郡信楽町勸旨に所在する玉桂

寺の阿弥陀如来像胎内から発見された「エソ」の交名<sup>(24)</sup>など、無視出来ない内容の資料群の登場によって、東北地方の歴史は新地平を開かれつつある。これに対して東国地域の歴史像は、むしろ古代史と中世史との不連続が目立つようである。

古代に関する限り、東北地域に関する研究は、東国地域に関する研究よりも質量ともに優っているように思われる。そのことが、本稿執筆の契機のひとつではあるが、それらの総てを知悉している訳ではないことに、不安を感じざるを得ない。古代東国地域の歴史像の再構成に向けての第一歩という事でご海容頂ければ幸いである。なお、一部の資料収集に当たっては、特に立教大学大学院生田中禎昭氏のお手を煩わせた。文末ながら記して感謝の微意を表したい。

# 注

- (1) 例えば、宮城県仙台市所在の郡山遺跡に集約されてくるような動きは、本来東北地域が律令国家の枠外に在ったわけではないことを示していると理解出来るのではないだろうか。

また、石母田正「大化の改新の史的意義」『日本の古代国家』岩波書店、一九七一年）など。

- (2) 今泉隆雄「八世紀前半以前の陸奥国と坂東」『地方史研究』第三九巻五号、一九八九年）参照。

- (3) 拙稿「日本古代の『移動』と『定住』」『歴史学研究』五八一号、一九八八年）
- (4) 春田隆義「坂東から関東へ」『古代の地方史』五坂東編所収、朝倉書店、一九七七年）。
- (5) 林陸朗「蝦夷対策と東国」『古代の地方史』五坂東編所収、朝倉書店、一九七七年）。また、最近では関幸彦「安倍猿島臣とその周辺」『日本歴史』四六六号、一九八七年）がある。
- (6) この点については、例えば前掲注(5)林論文、小山靖憲「古代末期の東国と西国」『新版岩波講座「日本歴史」四所収、一九七六年）など参照。
- (7) 虎尾俊哉「律令国家の奥羽経営」『古代の地方史』六奥羽編所収、朝倉書店、一九七八年）が委曲を尽くされている。
- (8) 前掲注(2)今泉論文に整理されている。
- (9) 古案跡研究会による一連の成果によって明らかである。
- (10) 「各地域における最後の前方後円墳——東日本Ⅱ岩手県（草間俊一執筆）」『古代学研究』一〇六号、一九八四年）。
- (11) 高野芳宏・進藤秋輝・熊谷公男・渡辺伸行「多賀城出土の文字瓦（その一）」（東北歴史資料館『研究紀要』Ⅲ、一九七六年）。但し、平川南「文字瓦」『多賀城市史』第五巻所収、一九八六年）などでは、明言を避けられている。
- (12) 例えば篠川賢「国造制の成立と展開」（吉川弘文館、一九八五年）など。
- (13) 例えば平川南「律令制下の多賀城」『多賀城跡——政庁跡・本文編』所収、一九八二年）など。
- (14) 拙稿「大宝令制定前後の地域編成政策」『地方史研究』三六巻三号、一九八六年）。

- (15) 平川南「俘囚と夷俘」（青木和夫先生還暦記念会『日本古代の政治と文化』所収、吉川弘文館、一九八七年）の整理が網羅的である。
  - (16) 高橋富雄『蝦夷』（吉川弘文館、一九六三年）。
  - (17) 例えば中村光一「俘囚料の設置をめぐって」（『延喜式研究』創刊号、一九八八年）参照。
  - (18) 拙稿「平安中期上野国の一様相」（『群馬県史研究』二五号、一九八七年）。
  - (19) 例えば前掲注（13）平川論文が網羅的であるので参照されたい。
  - (20) 佐々木常人「鎮兵小考」（東北歴史資料館『研究紀要』十一号、一九八五年）の整理を参考にした。
  - (21) 拙稿「『上毛野国造』について」（『群馬県史研究』三十号、一九八九年）。
  - (22) 防人に関する理解は、野田嶺志『防人と衛士』（教育社、一九七七年）による。
  - (23) 保立道久「古代末期の東国と留任貴族」（『中世東国史の研究』所収、東大出版会、一九八八年）。
  - (24) その評価は分かれるところだが、入間田宣夫「中世エゾの人名について」（『北からの日本史』所収、一九八八年）など、多くの関連論文がある。
- （一九八八年立教大学史学専攻博士課程後期課程満期退学、群馬県埋蔵文化財調査センター）